

木曾・奈良井宿の町並調査

建 造 物 研 究 室

奈良井宿は長野県木曾郡桧川村奈良井にあり、江戸時代には旧中山道の宿場町であった。昭和49年度に実施した町並調査は、伝統的町並の形成、現在の特徴を明らかにすることを目的とした。この調査で得た資料は奈良井宿保存のための施策をたてる基礎資料になる。調査は当研究所が主体となって行ない、桧川村教育委員会が協力した。なお今回の調査は全国各地10箇所の市町村で実施した町並・集落調査のうちの1つである。

調査地区は奈良井宿の旧宿場町を中心に、周辺を含めた奈良井地区である。また必要に応じて、桧川村、木曾十一宿の調査を行なった。調査は、①奈良井地区の1/1000地図(図1参照)とこの地図を利用して時代別・用途別などの分布図の作成、②奈良井宿の中央部で町並立面図作成のための写真測量、③町家の平面・構造・建具などの実測、④町家正面の現状のデザイン要素の抽出と復原調査、⑤町並・町家の写真撮影、⑥歴史的考察に必要な絵図面・古文書の史料調査、⑦古老からの聞き取り調査、町並保存についての地元住民の話し合い、⑧観光客を対象としたアンケート調査、などであった。

奈良井宿の旧街道は往時の形態を維持していて大きい変化はない。街道に沿って約1kmの両側に町家が建ち並ぶ線型集落である。町の山側には4社5寺あり、街道から奥に引込んだ位置にある。往時の町施設の1つである水場も5箇所あって、現在も利用されている。こうして社寺や町施設が多く町家と一体となって、旧宿場町の雰囲気をよく保持している。町の背景は常に周辺の山々で自然環境も良好である。

街道に沿った宿内の建物の時代別分布をみると、江戸時代末から明治時代の建物が約6割で戦前の建物を加えると約8割になり、木造が圧倒的に多い。町家の伝統的様式は切妻・平入で、正面では中二階が一階よりも少し前に出る出梁造りと呼ばれる構造である。二階は低く中二階で、明治末頃にやや高くなり昭和初期には本二階になる。伝統的様式では軒高・出梁高が揃い、町

並景観に強い統一感を与える。しかし町並景観は道路と町家が関連しあうので、道路の広狭・折れ曲り・坂道などによって変化に富み単調にはならない。

町家正面は出梁造りに特徴があるが、出梁下の猿頭をつけた装飾的な小屋根や、間口一杯に通す胴差や入口を除く間口に通す台框は背が高く、これらにも特徴がある。一階正面の柱間装置を復原してみると入口は大戸、その他はシトミであった家がほとんどであった。現在はガラス戸の家が多く、ガラス戸の前に格子を取付けている家もある。中二階正面では復原すると、開放やてすりのみの家が約7割、格子が約3割であった。中二階では両側に袖壁をつけたり、また腰壁・腰長坤をつけたりする家が町の中央部を中心に多い。中二階は全体的に一階ほど改造が多くなり、旧状をとどめている家が多い。

現在みることのできる奈良井宿の町並景観は、天保年間の大火後の中二階建の出梁造りの町家が建ち並んだ町並が基礎になっている。大口やシトミが取払われガラス戸になっているが、町並景観は江戸末期の旧宿場町の景観が色濃いと言える。

現在の奈良井は戸数388戸、人口1438人の山間の静かな集落である。かつては「奈良井千軒」といわれたほど、漆工・櫛・曲物の木工業が盛んな宿場町として栄えていた。明治になって宿駅制度が廃止されたことや、漆工・櫛の生産が隣の平沢・藪原で隆盛したことなどから奈良井宿は衰えていった。しかし漆工は現在でも奈良井の主な産業であるし、曲物・竹細工など、伝統産業が盛んである。奈良井宿は木曾路のうちでも最もよく宿場町の面影をのこし、周囲の自然環境や現在に受継がれている伝統産業と一体となって魅力ある町になっている。

昭和44年に宿内の町家が流出移築されようとした出来事を契機に、住民は自分達の町をみなおし保存しようとする動きが始まる。その後多くの研究者による町並の調査研究活動が続き、住民の町並保存の意向が強くなってきている。住民の生活の制約を最小限にしつつ町並保存をはかり、一方では増加する傾向にある観光客にも対応していく、という新しい町づくりはむずかしい問題が多いだけに、住民を中心として村当局の援助のもとに町並保存を進めることが期待される。（調査の詳しい内容と結果は当研究所の学報として刊行する予定である。）（上野邦一）